

## 序

高崎市は、広大な関東平野の北端に位置し、群馬県を代表する中核市です。平成の大合併により、人口は37万人を超え、県内で最大の人口を擁する都市となりました。古来より上信越を結ぶ交通の拠点として栄え、中山道と三国街道の分岐点、上越新幹線と北陸新幹線の分岐点ともなるなど、全国有数の交通拠点都市でもあります。また、江戸時代には、高崎藩の城下町、宿場町として大いに賑わい、現在でも県内有数の商業都市として栄えています。

今回発掘調査を実施しました下滝地区は、近年、国道354号線バイパス建設事業、関越自動車道高崎玉村スマートインターチェンジ整備事業、さらに高崎工業団地推進事業など目覚ましい開発が続いています。

発掘調査では、古代から近世に至る遺跡を確認することができ、本地域が、いにしえより先進文化の素地を築いてきた様子が明らかとなりました。今回の発掘調査により得られた資料が、古代史解明と郷土理解への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の発掘調査ならびに報告書作成に多大なるご協力をいただきました地元関係者の皆様、関係各機関の方々に、心より感謝申し上げます。序といたします。

平成31年3月

高崎市教育委員会  
教育長 飯野眞幸

## 例 言

1. 本書は高崎市立高崎特別支援学校プレイルーム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理は、高崎市教育委員会文化財保護課が行った。
3. 発掘調査の事項は以下のとおりである。

遺跡番号	高崎市遺跡番号 701	高崎市埋蔵文化財包蔵地（下滝 34-2 遺跡）
所在地	群馬県高崎市下滝町 776 番地 1	
調査期間	平成 29 年 5 月 15 日から平成 29 年 6 月 12 日	
調査面積	231m <sup>2</sup>	
調査担当	小根澤 雪絵（文化財保護課埋蔵文化財担当） 茂木 由行（同課嘱託職員）	
整理期間	平成 31 年 2 月 1 日から平成 31 年 3 月 15 日	

4. 本書の執筆、編集は小根澤が行った。
5. 本書で使用した遺構写真は茂木が撮影した。
6. 発掘調査の資料及び出土品は高崎市教育委員会が保管している。
7. 発掘調査および本書の作成にあたって下記の機関より多大なるご協力を頂いた。  
高崎市立高崎特別支援学校 高崎市教育委員会教育総務課

## 凡 例

1. 本書で使用した地図は、国土地理院発行の 1 / 25,000（電子データ）、高崎市都市計画図 1 / 2,500 を使用した。
2. 遺構平面図の北方向は座標北を示し、座標は平面直角座標IX系（世界測地系 2011）である。
3. 挿図中で用いた遺構の略称 SD は溝跡を示す。
4. 掲載遺構、遺物図にはそれぞれスケールを付した。
5. 本文中の As-A は浅間 A 軽石（1783 年：天明三年降下浅間山噴出物）、As-B は浅間 B テフラ（1108 年：天仁元年浅間山噴出物）、As-C 浅間 C 軽石（3 世紀末頃浅間山噴出物）を示す。
6. 遺構土層堆積の説明に記載した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局（財）日本色彩研究所監修 2014 『新版標準土色帖』を参照にした。

## 目 次

### 序／例言／凡例

1. 調査に至る経緯と経過	1
2. 遺跡の立地と環境	1
3. 確認された遺構と遺物	4
4. まとめ	7

### 報告書抄録

## 1. 調査に至る経緯と過程

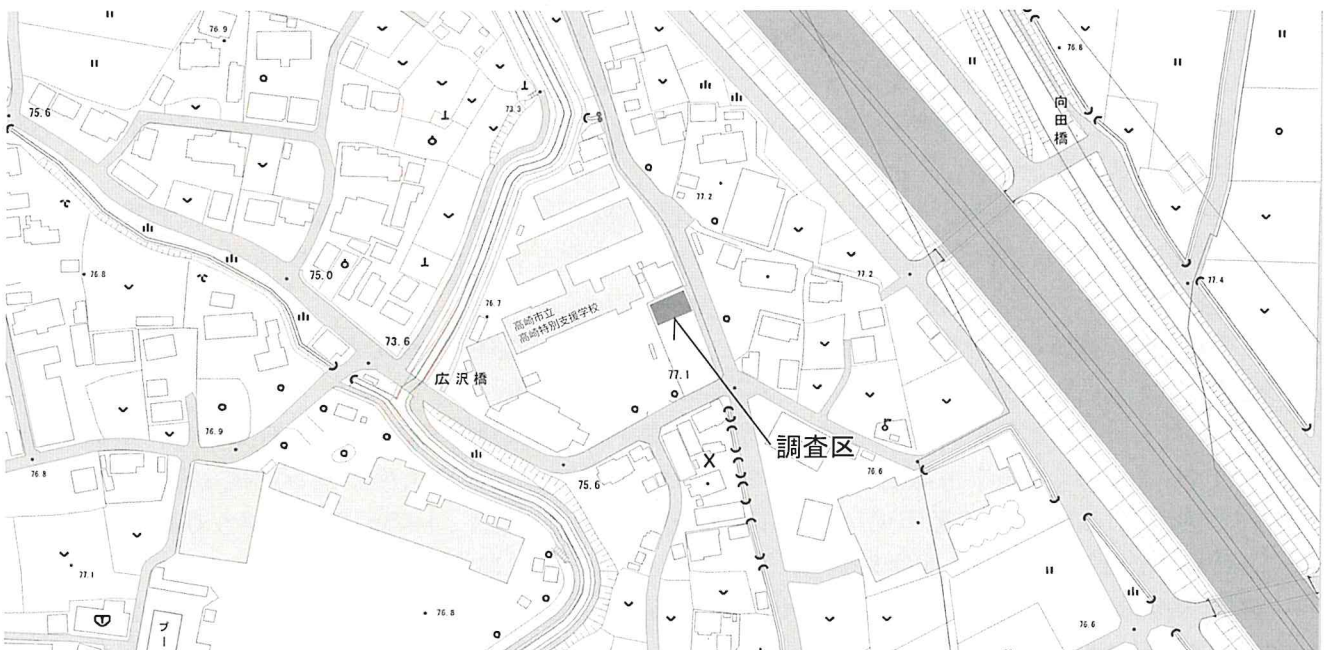
**調査に至る経緯** 平成 28 年 6 月、高崎市教育委員会教育総務課より高崎市下滝町内に所在する高崎市立高崎特別支援学校プレイルーム建設について事業が計画された。事業予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地(下滝町 34-2 遺跡) であることから、教育総務課より文化財保護課に試掘調査の依頼があった。これを受けて文化財保護課は、平成 28 年 11 月 5 日に遺跡の有無を確認するための試掘調査を実施した。調査では古代と思われる複数の遺構を検出し、遺跡が広く分布している様相を確認した。この結果を受けて、教育総務課と文化財保護課の間で工事と文化財の遺跡保護の協議が行われたが、工事計画の変更は困難との回答で、本調査の計画が行われた。その後、文化財保護法第 94 条に基づく通知が提出され、記録保存のための本調査が実施されるに至った。

### 調査の経過

- 5 月 15 日 発掘調査開始。調査区東半分を重機による表土掘削。
- 5 月 17 日 SD01 ～ 03 検出。人力による掘削作業。
- 5 月 19 日 調査区東半分の全体写真撮影。遺構平面測量。断面測量。
- 5 月 23 日 重機による反転作業。調査区西半分を重機による表土掘削。
- 5 月 24 日 調査区西半分遺構検出。SD04 検出。人力による掘削作業。
- 6 月 9 日 調査区西半分の全体写真撮影。遺構平面測量、断面測量。
- 6 月 12 日 重機による埋め戻し完了。発掘調査終了。

## 2. 遺跡の立地と環境

**遺跡の地理的環境** 下滝沢向遺跡は、群馬県高崎市下滝町に位置し、玉村町境付近となる高崎市東端にある。高崎玉村スマートインターチェンジの北西約 400 m に位置し、遺跡地のすぐ東側を関越自動車道が走行する。遺跡地の西方約 500 m には、榛名山東南麓に源を発する井野川が南流し、東方約 1.3km には三国山系に源を発する利根川が南流し、本遺跡は二つの河川に挟まれた前橋台地上に立地する。付近の標高は約 77.1 m を測る。また、遺跡地の西側は井野川と合流する小河川(広沢川) が走行し、東方約 200 m に滝



第 1 図 遺跡位置図 (『高崎市都市計画図』 1 / 2,500 を使用)

川用水が南流する。周辺の土地利用は、水田麦作の二毛耕作が主体で、場所により微高地帯に畑地も広がる。周辺は用水に恵まれた緑豊かな耕作地帯であったが、国道 354 バイパスの道路整備、高崎玉村スマートインターチェンジの建設、高崎工業団地の造成に伴い、近年は急速にその土地利用が変化している。

**遺跡の歴史的環境 旧石器時代**：遺跡地周辺は約 2.0～2.4 万年前の浅間山の山体崩壊による泥流層が厚く堆積するため、旧石器の遺構・遺物は確認されていない。本遺跡の南西約 2.2km、烏川左岸の段丘上に位置する岩鼻坂上北遺跡（2）から木葉形の槍先型尖頭器が出土している。出土層位は不明であるが、調整加工・形状から旧石器の存在が考えられる。

**縄文時代**：草創期は元島名瓦井遺跡（3）においてチャート製の有舌尖頭器が出土している。As-B 下水田面のトレンチからの出土で、本来の出土層位は不明である。周辺の微高地上に包蔵されていた可能性が考えられる。前期は、前期前半の関山段階は周辺では確認できず、前期中葉から遺跡の展開が見られる。前期中葉は、下斎田遺跡（4）、滝川C遺跡（5）において黒浜式期、諸磯 a 式期の土器が出土している。前期後半は、八幡原 A 遺跡（6）、八幡原大鼻・稲荷遺跡（7）において諸磯 b 式・諸磯 c 式期の住居跡、土器が出土している。中期は、下斎田遺跡、八幡原遺跡において加曾利 E 式期の土器が出土している。後期は、元島名遺跡（8）において堀之内式期の土坑墓 1 基を検出し、万相寺遺跡（9）において柄鏡形の敷石住居を 1 軒検出している。

**弥生時代**：前期末～中期初頭は、高崎情報団地遺跡 I（10）において破片資料が出土している。中期後半では、八幡原若宮遺跡（11）において東北南部系、荒口前原系の土器が出土している。中期後半以降は、鈴ノ宮遺跡（12）、矢島竹之内遺跡などにおいて、後期に至る拠点集落、方形周溝墓、壺棺墓などを検出している。後期前半以降は、万相寺遺跡、元島名遺跡などで集落の展開が見られる。これらは井野川自然堤防の微高地上を選定しており、井野川下流域の低地帯では遺構は少ない。

**古墳時代**：前期の古墳は、4 世紀初頭とされる県内最古の前方後方墳である元島名將軍塚古墳（13）、4 世紀後半代の柴崎蟹沢古墳などがある。柴崎蟹沢古墳は、ほぼ消滅し正確な位置が不明であるが、「**正**始元年」銘の三角縁神獣鏡の出土が伝えられ、その同型鏡関係から大和王権との強い繋がりが考えられている。その後、中期に入ると、5 世紀前半代に普賢寺裏古墳（14）、5 世紀中頃から後半に不動山古墳（15）、5 世紀後半に岩鼻二子山古墳（16）など相次いで前方後円墳が築造される。後期は、6 世紀後半に綿貫観音山古墳（17）の築造がある。副葬品は、美術工芸品としても優品が多く、中でも銅製水瓶、獣帯鏡、異形冑、装飾大刀などは、中国や朝鮮半島との深い関係を示す貴重な資料である。

集落は、後期に入り急激に増加し、下滝高井前遺跡（20）、綿貫伊勢遺跡（21）、綿貫牛道遺跡（22）、下滝赤城遺跡（23）、下斎田・滝川 A 遺跡（4）、上滝社宮司東遺跡（24）、下滝梅崎遺跡（25）などで 6 世紀前半以降の住居跡を確認している。

生産遺構では、6 世紀初頭と考えられる Hr-FA 下水田遺構が上滝榎町北遺跡（26）、上滝 II 遺跡（27）、上滝五反畑遺跡（28）、下滝天水遺跡（29）などで確認されている。6 世紀中頃の Hr-FP 下水田遺構は上滝榎町北遺跡（26）、上滝 II 遺跡（27）などで検出されている。

**奈良・平安時代**：集落は井野川流域に広く分布し、平安時代の寺院跡が確認された綿貫遺跡（30）、綿貫伊勢遺跡（21）、下滝天水遺跡（29）などに集落の展開が見られる。

生産遺跡は、井野川とその支流の粕川流域の低地帯を中心に、条里地割に則した As-B 下水田遺構が広く確認されている。中でも矢中村東遺跡（31）では、As-B 下水田面に伴う大型水溜状遺構より、9 世紀中頃の鋳造と推定される銅印「物部私印」が出土している。物部氏と条里施工、水田開発の関連が指摘されている。また高崎情報団地 I 遺跡では、推定東山道「牛堀・矢ノ原ルート」が確認されている。

**中世**：城館跡を主とする遺跡が多く分布する。八幡原館（33）は、鎌倉幕府の有力御家人、安達盛長の屋敷地と推定されている。『滝川村誌』によると、本遺跡地と小河川（広沢川）を介した西側には、五左衛門原屋敷（34）と呼ばれる砦跡が所在すると伝えられるが、明確な遺構などは確認できていない。



第2図 周辺遺跡分布図 (国土地理院『高崎』1 / 2,500 を使用)

## 遺跡分布図掲載遺跡一覧

- |                             |               |                   |              |
|-----------------------------|---------------|-------------------|--------------|
| 1. 本報告書（下滝沢向遺跡）             | 2. 岩鼻坂上北遺跡    | 3. 元島名瓦井遺跡        | 4. 下斎田・滝川A遺跡 |
| 5. 滝川C遺跡                    | 6. 八幡原A遺跡     | 7. 八幡原大鼻・稲荷遺跡     | 8. 元島名遺跡     |
| 9. 万相寺遺跡                    | 10. 高崎情報団地I遺跡 | 11. 八幡原若宮遺跡       | 12. 鈴ノ宮遺跡    |
| 13. 元島名将軍塚古墳                | 14. 普賢寺裏古墳    | 15. 不動山古墳         | 16. 岩鼻二子山古墳  |
| 17. 綿貫観音山古墳                 | 18. 前山古墳      | 19. 若宮八幡北古墳       | 20. 下滝高井前遺跡  |
| 21. 綿貫伊勢遺跡                  | 22. 綿貫牛道遺跡    | 23. 下滝赤城遺跡        | 24. 上滝社宮寺東遺跡 |
| 25. 下滝梅崎遺跡                  | 26. 上滝榎町北遺跡   | 27. 上滝II遺跡        | 28. 上滝五反畑遺跡  |
| 29. 下滝天水遺跡                  | 30. 綿貫遺跡      | 31. 矢中村東（A・B・C）遺跡 |              |
| 32. 柴崎遺跡群（東原・富士塚・富士塚前・村間遺跡） | 33. 八幡原館      | 34. 五左衛門原屋敷       |              |
| 35. 下滝館                     | 36. 八幡山館      | 37. 下斎田城          | 38. 岩鼻の砦     |
| 39. 岩鼻館                     | 40. 東中里城      | 41. 元島名城          |              |
| A. 綿貫古墳群                    | B. 若宮古墳群      | C. 倉賀野東古墳群        | D. 倉賀野西古墳群   |

## 3. 確認された遺構と遺物

**調査方法** 発掘調査は、As-B 混土層よりも下層にあたる洪水堆積層の上面まで掘り下げて遺構を確認した。遺構確認面までは重機による表土除去を行った。遺構の掘り下げについては、人力による掘削作業を行った。遺構平面実測図は、トータルステーション、オートレベルを使用して、各遺構を1/20を基本として作成した。全体図については、1/40測量を行った。遺構断面実測図は1/20を基本として作成し、土層堆積の観察にあたった。写真撮影は、モノクロ35mm・カールスライド35mm・デジタルカメラの3台にて各調査段階の記録を撮った。

**基本土層** As-Aを含む旧耕作土I・II層、その下層には河川の氾濫と考えられるシルト粘質土の洪水層II層が堆積する。遺構確認面はV層で浅黄色の粘質土に地山由来の鉄分が凝集した中礫・粗礫を多く含むIII層とV層の間にはAs-Bの二次堆積（IV層）をわずかに含むが、堆積場所は調査区北東角付近だけで全層には認められない。V層以下の下層は粘質が強く、VII層はAs-Cと思われるミリ単位の白色細粒子を含む。

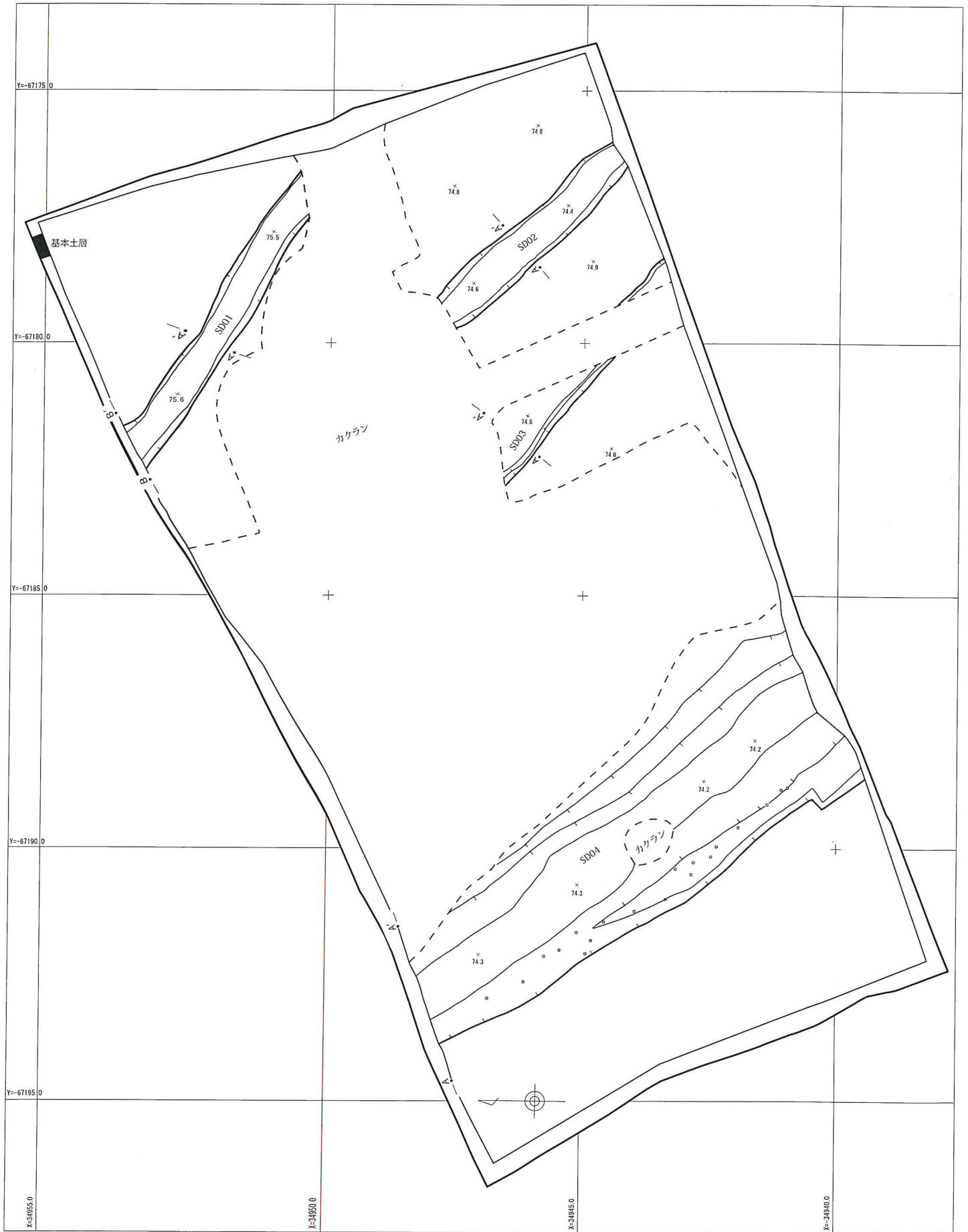
### 確認した遺構

**SD01** 調査区東端で確認した。確認した幅は0.7～0.9m、深さ約0.3mを測る。覆土は砂質主体で流氷形跡がある。走行方位はN-62°-W。走行は、その高低差から北西→南東方向の流路である。遺物は覆土中位より、10世紀頃と考えられる須恵器坏（第5図-1）が出土した。遺構検出面上位にIVa・IVb層が堆積し、覆土中にAs-Bを含まないことから、古代の溝と考えられる。

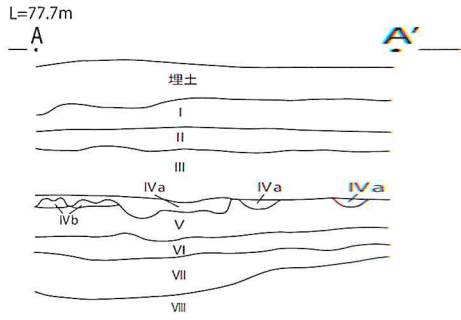
**SD02** SD01の東側で検出した。確認した幅は0.8～0.9m、深さ約0.15mを測る。覆土は灰色粘質土で砂層堆積はない。走行方位はN-44°-W。出土遺物はなかった。As-B降下前の遺構である。

**SD03** SD02の東側で検出した。溝幅は確認できていない。深さ約0.2mを測る。覆土は下層に粘質土。上層位に砂層が堆積する。走行方位はN-50°-W。出土遺物はなかった。As-B降下前の遺構で、走行方位はSD02とほぼ同じである。

**SD04** 調査区西端で確認した。溝の東側立ち上がりは、近現代の建物の攪乱により検出できていない。拵上幅は約3.5mを測る。深さは北壁面で0.9～1.0mを測る。覆土は中位に砂質層とAs-Aを多く含む層がある。走行方位はN-39°-W。走行は、その高低差から北西→南東方向の流路である。出土遺物は焙烙・播り鉢などがある（第5図-2～5）。また、溝の西側斜面から、護岸の板を打ち付けたと思われる木杭の痕跡が多数検出された。遺構は、覆土最下層の4層にはAs-Aを含まないことから、As-A降下前の近世の溝と考えられる。



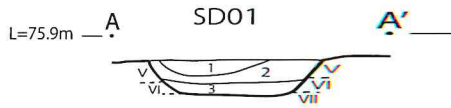
第3図 調査区全体図



標準土層

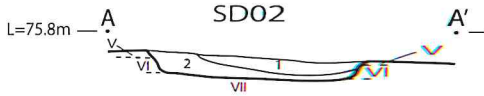
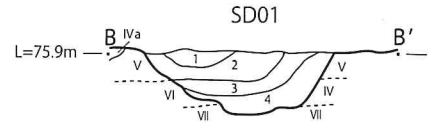
埋土 泥岩・シルト岩のブロックを多く含む近年の埋土。

- I 10YR4/1 (褐灰色) 表土。砂質で粘性は弱い。
- II 10YR3/2 (黒褐色) As-A を多く含む。やや砂質で粘性弱い。
- III 10YR6/4 (にぶい黄橙色) シルト質で粘性は強い。洪水堆積層。
- IV a 10GY3/1 (暗灰色) As-B (1mm前後の細かいもの主体とするが3mm前後のものをわずかに含む) の二次的な堆積。
- IVb 10Y4/1 (灰色) 粘質土。
- V 5Y7/3 (浅黄色) 粘質土で5mm前後の赤褐色鉄分の凝集を多く含む。上面が遺構確認面。
- VI 5Y5/1 (灰オリーブ色) 粘質土。
- VII 5G3/2 (暗緑灰色) 粘質土。
- VIII 10YR7/2 (にぶい黄橙色) 粘質土。見た目でははっきりしないが移植ゴテではAs-Cと思われるmm単位の粒子にあたる。深い部分の下半ではこの粒子は含まれない。



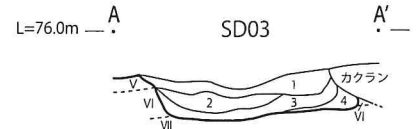
SD01

- 1 10Y5/1 (灰色) 粘質土。
- 2 10Y4/1 (灰色) 全体に砂質で粘性はない。
- 3 10Y5/1 (灰色) 粘質土。
- 4 10Y5/1 (灰色) 全体に砂質だが黒褐色粘質土のブロックを含む。



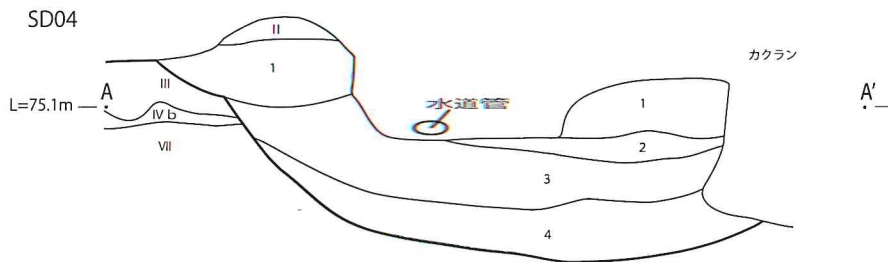
SD02

- 1 10Y6/1 (灰色) 粘質土。
- 2 10Y4/1 (灰色) 粘質土。鉄分の沈着で全体に赤味を帯びる。



SD03

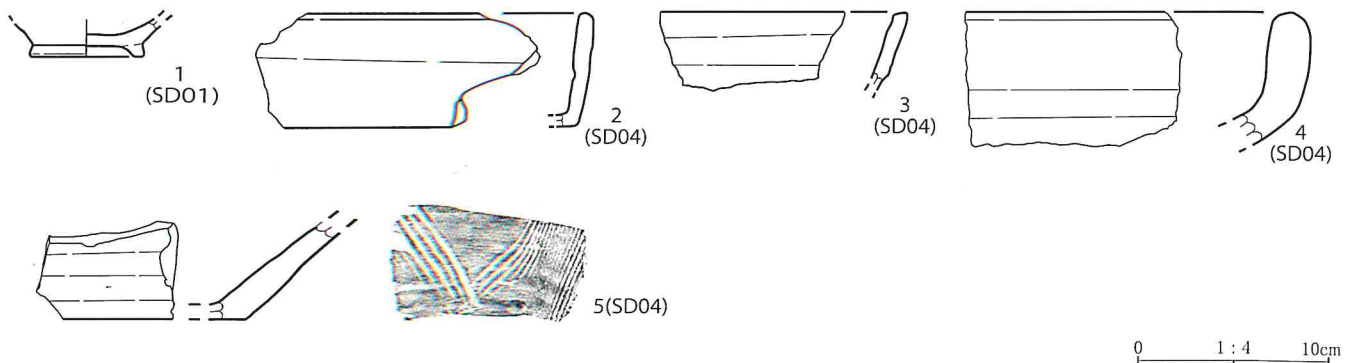
- 1 7.5Y3/1 (黒褐色) 砂層。
- 2 10Y6/1 (灰色) 粘質土。
- 3 10Y4/1 (灰色) 鉄分の沈着で全体に赤味を帯びる。
- 4 10YR4/1 (褐灰色) 粘質土。



SD04

- 1 7.5Y4/1 (灰色) 粘質土。As-A と思われる軽石を含む。
- 2 7.5Y5/1 (灰色) 粘質土。一部砂のラミナが見られる。
- 3 7.5Y4/1 (灰色) 粘質土とAs-Aを多く含む砂層とで水平のラミナが見られる。
- 4 7.5Y5/1 (灰色) 粘性が強い。

第4図 基本土層図・遺構土層断面図



第5図 出土遺物図



## 出土遺物観察表

SD01

番号	器種	法量 (cm)	①焼成・色調 ②胎土 ③残存	成形・整形技法の特徴	出土位置・注記
1	須恵器 杯	口径：— 底径：(6.0) 器高：残 2.0	①還元 やや硬質 ②灰色 ③白雲母細粒、角閃石、石英、 黒色細粒 ④底部 1/3	外面 ロクロ整形。高台貼付時 周辺撫で。 内面 ロクロ整形。 吉井・藤岡窯産。	SD01 一括

SD04

番号	器種	法量 (cm)	①焼成・色調 ②胎土 ③残存	成形・整形技法の特徴	出土位置・注記
2	焙烙 軟質陶器	口径：— 底径：— 器高：残 5.5	①灰暗色 ②角閃石、黒色細粒 ③口縁破片	体部ロクロ整形。 在地産か。	SD04 AP 上層
3	焙烙 軟質陶器	口径：— 底径：— 器高：残 4.0	①黒灰色 ②角閃石、黒色細粒、軟質褐色 細粒 ③口縁破片	体部ロクロ整形。内外面煤付着。 在地産か。	SD04 AP 上層
4	焙烙 軟質陶器	口径：— 底径：— 器高：残 7.5	①橙褐色 ②角閃石、軟質褐色細粒（地山 細礫か）、黒色細粒 ③口縁破片	体部ロクロ整形。 在地産か。	SD04 AP 上層
5	播り鉢 陶器	口径：— 底径：— 器高：残 4.0	①淡灰褐色 ②石英粒、軟質白色粒、黒色細 粒 ③底部破片	ロクロ整形。内外面刷毛で施釉 した錆釉が付着。内面に櫛歯状 工具による播り目。	SD04 AP 上層

## 4. まとめ

今回の発掘調査では、古代の溝 3 条、近世の溝 1 条を検出した。調査区中央部のほとんどは、旧農協建物の基礎により遺構の検出は出来なかったが、古代から現代における土地利用の変遷を把握することができた。

本遺跡地の西側には、自然の小河川と考えられる河谷の深い河川（広沢川）が蛇行する。本遺跡で検出した溝は、検出した溝底のレベルから走行方向は北西→南東方向で、おそらくこの小河川からの取水に係る遺構と考えられる。SD04（As-A 降下前の近世の溝）は、確認された上幅は 3.5 m で、その規模から走行方向の下流域に生活・農業用水として使用していたと考えられる。SD01～03（As-B 降下前の古代）は、いずれも小規模の溝で、本遺跡が立地する井野川自然堤防状となる微高地帯に利用した水路であろう。

### 参考文献

高崎市教育委員会 1995 『平成 6 年度高崎市内小規模埋蔵文化財緊急発掘調査概要—下滝梅崎遺跡・山名土合遺跡』

高崎市市史編さん委員会 1999 『新編高崎市史』資料編 1 原始古代 I

高崎市市史編さん委員会 2000 『新編高崎市史』資料編 2 原始古代 II

高崎市市史編さん委員会 1996 『新編高崎市史』資料編 3 中世 I



SD01～03 全景 (西から)



SD01 全景 (南東から)



SD01 北壁セクション (南から)



SD02・03 全景 (南から)



調査区反転作業 (南から)



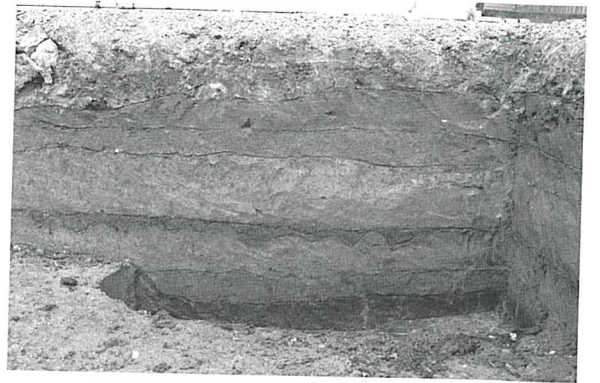
SD04 全景 (東から)



SD04 全景 (北から)



SD04 北壁セクション (南から)



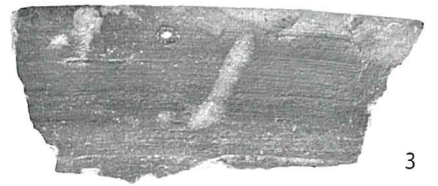
調査区標準土層



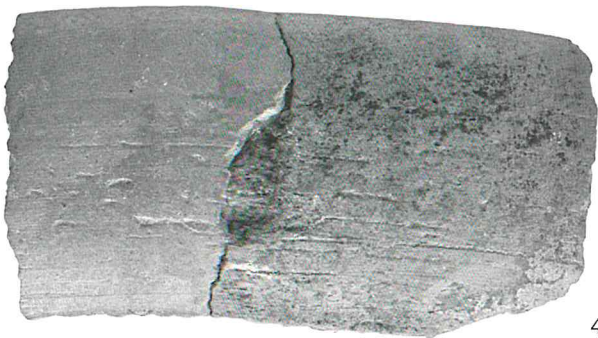
1



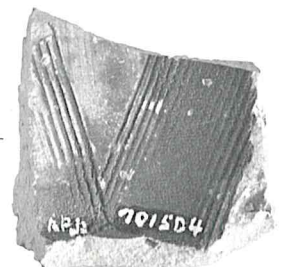
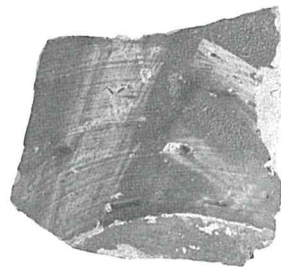
2



3



4



5

SD01 ~ 04 出土遺物

発掘調査報告書抄録

ふりがな	しもたきさわむかいいせき
書名	下滝沢向遺跡
副書名	高崎市立高崎特別支援学校プレイルーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 430 集
編著者名	小根澤 雪絵 茂木 由行
編集機関	高崎市教育委員会
所在地	〒 370-8501 群馬県高崎市高松町 35 番地 1
発行年月日	平成 31 (2019) 年 3 月 27 日

ふりがな	ふりがな	コード		位 置		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北 緯	東 経			
しもたきさわむかいいせき 下滝沢向遺跡	たかさきし 高崎市 しもたきまちあざ 下滝町字 さわむかい 沢 向	10202	701	36° 18' 45"	139° 05' 06"	20170515 ~ 20170612	231	建物建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下滝沢向遺跡	生産跡 散布地	古代～近世	溝 4 条	須恵器片 軟質陶器	

高崎市文化財調査報告書第 430 集

下滝沢向遺跡

— 高崎市立高崎特別支援学校プレイルーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

印刷日 平成 31 年 3 月 25 日

発行日 平成 31 年 3 月 27 日

編 集 高崎市教育委員会文化財保護課

発 行 高崎市教育委員会

〒 370-8501 群馬県高崎市高松町 35 番地 1

電話 027 (321) 1292

印 刷 荒瀬印刷株式会社